Osaka University Knowledge Archive

Title	基調講演 ： 金時鐘さんがみつめてきたもの
Author(s)	鵜飼, 哲
Citation	越境文化研究イニシアティヴ論集. 2020, 3, p. 13-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75555
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

基調講演

金時鐘さんがみつめてきたもの

鵜飼　哲

こんにちは，鵜飼哲と申します。東京からやってまいりました。自分の専門ではない在日朝鮮人文学がテーマの会にお招きいただいたとき，とりわけ金時鐘さんのお仕事について話をする機会をいただいたときには，広く言えば私の世代の多くの日本人にとって，金時鐘さんはどんな方なのか，最初に自分の考えをお伝えすることにしています。金時鐘さんはまず「詩人」と考えられていると思いますが，私たち，つまり「80 年光州」の時期にはじめて金時鐘さんの存在を同時代人として知った者たちにとっては，時鐘さんは同時に「思想家」であり，「活動家」であり，そしてまた「先生」でもありました。「教師」としての金時鐘という存在に私たちは，遠くからであれ，薫陶を受けてきました。そういう時代背景が，たんに個人的にではなく，おそらく集団的にあるのではないかと思っております。

今日はやや恐る恐るこちらに伺ったのですが，それにはいくつもの理由があります。さきほどもご紹介があったように，昨年から『金時鐘コレクション』が刊行されています。目の前に版元の藤原書店の社長の藤原良雄さんがいらっしゃいます。第 6 巻の解説をお引き受けしたのですが，じつは 5 月末が締め切りでした。ところが，今日に至るまでまだ原稿が出せていない状態です。私が担当する巻は近年のお仕事が中心です。さきほどスライドにありました 1998 年の『化石の夏』以降，とりわけ 2011 年 3 月の震災以降に書かれた詩が収められる予定になっています。最新の詩集『背中の地図』を中心に，自分なりの考えをまとめようとしているところです。今日の会の基調講演など本来とても私の担えるようなことではないのですが，今日 30 分，皆さんと一緒に金時鐘さんのお仕事を，とりわけ現在の観点に立って考えてみたいと思います。金時鐘さんがこれまでのお仕事を踏まえつつ今どのような地点に到達しておられるのか，どんな詩作，思索に挑んでおられるのか，そうしたことについて，一つの討論材料にしていただければという気持ちでレジュメを作ってきました。この後は，レジュメに沿ってお話をさせていただきます。

「日本の詩への，私のラブコール」（『図書』672 号，2005 年 4 月）というエッセーがあります。2005 年の文章ですが，じつに味わい深い，何度読み直しても新たな発見がある，その発見がまた，その都度震えがくるような発見であるというエッセーです。2005 年のこのエッセーを 2019 年に読む

と，本当に全身に震えが走ります。最初の冒頭のところを引用してありますのでご覧ください。

> 地球の新年は大津波の空前の大災害で明けた。その予兆でもあったのだろうか。日本でもやたらと災害のつづいた旧年であった。わけても熊の出没に見るような物言わぬものたちの悲劇は，人間の身勝手さが強いた終末のようで，心に食い入ってならなかった。それにかぶさってくるのがファルージャ（イラク）での，米軍による無差別攻撃の惨劇だ。これには自衛隊派兵という日本の政治状況も深く係わっていて，日本で暮らしていることの安逸さが却って，あるべき平和の秩序を自ら度外視しているのではないかとさえ思ったほどだ。いやたしかに，予兆めいた何かが耳の底でうずいてはいる。途方もない変動が今に安穏さのただ中で噴出しそうな気が，干上がった熊の胃袋の唸りとなって這い寄ってきている。

これは東日本大震災の 6 年前に書かれた文章です。「地球の新年は大津波の空前の大災害で明けた」。2004 年の 12 月末にスマトラ沖地震がありました。インド洋で起き，東南アジア，南アジア，アフリカ東岸まで含め，20 万人近くの方が津波で亡くなっています。2011 年の 3 月以降，私たちがこの数年前の他国の地震のことを思い出したかどうかという問いも，同時に思い返さずにはいられません。もう一つは，「予兆」というモチーフが，非常に強烈にあらわれていることです。金時鐘さんは，詩は「予兆」となりうる，「予兆」となることを求めるべきだという姿勢をつねに貫いてこられたと思います。今日は 90 歳のお誕生日をお祝いし，今年はまた日本に渡航されて 70 年という記念の年でもありますが，金時鐘さんはこの長い年月，つねに「予兆」を探し求めながら生きてこられたのではないかと考えてみたいのです。ですから，私にとって今日のこの場は，過去を振り返る機会ではありません。金時鐘さんが，つねに，一言で言えば未来に向けて詩を書いてこられた，そのことに私たちがどう向き合えるかを問うべき日なのではないかと思っています。

金時鐘さんにとって一つの災害は，さらにこれから来るべきものの「予兆」なのですね。「災害」というと，ともするとあとは癒し，回復，復興というような話になりますがそうではなく，一つの災害がさらにより深刻な事態が将来からやってくることの「予兆」として捉えられているということは，引用した数行から否定しようもなくお分かりになると思います。この年，2004 年には沢山の災害がありました。台風集中上陸ということで，6 月から 10 月まで，これほどたくさん台風が日本に上陸した年はなかった。台風以外にも，新潟，福井そして福島で，豪雨で沢山の方が亡くなった年です。そして，10 月には新潟県中越地震もありました。「その予兆でもあったのだろうか。日本でもやたらと災害が続いた旧年であった」。すらっと読み流してはいけない文章だろうと思います。

そしてこの一連の災害が，自然破壊によって食糧不足に陥った熊の，人間の居住空間への出没と駆除につながっていく。金時鐘さんの思考のなかでは，これらすべてがつながっている。たんに何かの勘で言われているのではない。そのあとのところを読んでみると，このことがとてもはっきりと分かります。「それにかぶさってくるのが」イラク情勢です。2004 年には，前年から始まったイラク戦争に，自衛隊が参加することになりました。自衛隊派兵による，米国の戦争への日本の加担

が，一連の災害に続いて想起される。この数行のなかで，どれだけの出来事が，時鐘さんの詩的な思考のなかで結び合わされているかということに，あらためて驚かされます。2019 年の現在，今度はイラン情勢が非常に緊迫しています。事態は今日まで，紛れもなくつながってきています。

ところが，もう少し読んでみると次のような部分にも出会います。「銭湯をがら空きにした『君の名は』がラジオドラマでもてはやされていたとき，それまでの警察予備隊はいつの間にか「自衛隊」に成り変わって，その自衛隊はいまどこか遠くへ出ていったままだ。このような状況のかげりぐらい，日本の詩は前衛の名にかけて宿してあるべきだ」。2005 年です。20 世紀に書かれた文章ではありません。「日本の詩は前衛の名にかけて」と言われていますが，「前衛」であるということは，朝鮮戦争の時代からイラク戦争までを，一つの視野のもとに収めていなければならないということでもあります。これは日本の詩に対する，大変な「ラブコール」ですね。この文章のタイトルが「日本の詩への，私のラブコール」だということを忘れずに本文を読んでいく必要がある。そしてこの「ラブコール」の厳しさに，私たちは目覚めなければならない。

『君の名は』というと若い方は最近のアニメ作品を思い浮かべられると思いますが，これは先代のほうの『君の名は』です。菊田一夫原作の，空襲によって引き裂かれた恋人同士の物語です。私のように，このラジオドラマが流行した時期から数年後に生まれた者にとっても，そのあとテレビドラマなどでリメークされて 60 年代半ばまで，さして関心がなくても，「真知子巻き」という女性のスカーフの被り方とか，とりわけ「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」というフレーズなどは，子どもでも覚えてしまうくらいの影響力があったものです。ところが，金時鐘さんにとって『君の名は』とは何であったかというと，このドラマが始まった 1952 年は朝鮮戦争の最中だったことに思い当たります。日本では講和条約の直後，独立後であり，日本人にとって戦争はすでに過去のものになっていた。ところが解放されたはずの朝鮮では，同じ民族同士の戦争の渦中だった。この戦争に反対して闘っていた在日朝鮮人にとって，この『君の名は』のブームはどのように見えたか。そのとき，米軍の要請で警察予備隊が結成され，やがて自衛隊になっていく。『君の名は』に夢中だった当時の日本人大衆は，この事態の重大性を見逃してしまう。そこから始まったプロセスの果てに現在がある。大半の日本人にはそのことは見えていない。2004 年の自衛隊のイラク派兵の際に，こんなことを思い出した日本の詩人がいたでしょうか。

このことを踏まえてその次の言葉を読んでみると，求められていることの大変さ，しかしあまりにもまっとうであることが心に染みてなりません。「先人の言葉を俟つまでもなく，詩人の心の中の思いを引き出すためには詩とは関係なさそうな，非詩的な方法，つまり観察，描写，分析，記録といった，そういうプロセスを経なくては思いを形あるものとして表に描き出せない。単純化はその過程でなされるものである。つまりは実感の高度に昇華したものが，抽象だということだ」。そして，こういう呼びかけが続きます。「自分に言い聞かすために，言う。まず見よう，見つめよう，と。詩は好もうと好むまいと現実認識における革命である」と。

私が今日のスピーチに「金時鐘さんがみつめてきたもの」というタイトルを選んだのは，ここの部分を参照してのことです。この「見よう，見つめよう」という呼びかけが，その前にご紹介した

ところに照らして考えるならば，どれだけ大変な作業であるかということですね。逆に言うと，日本には虚心に「見つめる」ことを阻害する，本当にさまざまな装置が埋め込まれているということでもあります。「天皇の代替わり」とか，「元号の変更」とか，「東京オリンピック」とか，そういうことによって福島や他の被災地からどれだけ人々の注意が奪われてきているでしょうか。「見つめる」ためには「見つめる」ことを阻害するものも「見つめる」必要がある。そのためには，「観察，描写，分析，記録」が欠かせないということですね。その作業がなされないところには「現実認識における革命」はないし「詩」はない。この「ラブコール」が受けられるかどうかということが，日本人，とりわけ日本の詩人に問われている。

昨年の 4 月にコレクションの刊行を記念して新宿文化センターで行われたシンポジウム「今なぜ，金時鐘か」で，「挨拶と朗読」ということで金時鐘さんがお話になった内容は，『現代詩手帖』（2018 年 9 月号）に記録が掲載されています。そこで時鐘さんは，「日本は世界に類がないくらい詩を軽んじる国」と言われています。それは，いま私がお話ししたことと，もちろん裏表の関係にあります。「日本の詩への，私のラブコール」という文章は，こういうふうに終わっています。「風のまにまに，熊の途切れがちな悲鳴が明滅している。霊寄せのしぼり声のような変動の兆しが，すぐそこの植え込みのかげで目をこらしている」。

2011 年 3 月 11 日，金時鐘さんは高見順賞を受賞されることになり，新幹線で東京に向かう途中に地震に遭われました。そしてこの運命に応答することを望まれて，以後の詩作が展開されていく。その成果が，『背中の地図』（河出書房新社，2018年）にまとめられています。そしてそののちも，作業を継続されています。

しかし，『背中の地図』に行く前に，『失くした季節―金時鐘四時詩集』（藤原書店，2010 年）にここで足を止めさせていただきます。高見順賞を受賞されたこの詩集の中の一編を，昨年新宿で金時鐘さんは朗読されました。そしてその詩について，はっきり「慰霊の詩ではない」と発言されました。そこから私は，金時鐘さんがこの間「四・三」（済州島四・三事件）を主題に書かれてきた一連の詩を，あえて「反慰霊」と呼んでみたいと思います。昨年はコレクション発刊と同時に，「四・三」70 周年という年でもありました。最初に朗読された作品は「死者には時がない」と題されています。私には昨年のシンポジウムのインパクトが非常に強く残っていまして，今日はこの日朗読された作品を特に参照しています。例えばこんなところが大変印象的です。「そこかしこからうなだれた人たちがあらわれる。／かすれてゆく悲鳴のような風が吹き渡る」。この一行が，このあと私がお話ししたいことのすべてに反響してくるような気がしています。

次に，高見順賞の授賞式で，私はお祝いのスピーチをさせていただいたのですが，そのときには恐ろしすぎて参照できなかった詩「鳥語の秋」を，ここで皆さんと一緒に読んでみたいと思います。

（前略）
なぜか秋の鳥は囀りがない。
ひよどりとか百舌とか　もう季節も果てると

声を嗄らしている音しか聴こえてこない。
他を寄せつけない金切り声に
いっそう影を深めていくのは
残照の中のあの黒い鳥だ。
（中略）
記憶の底ではすべてが静止画だ。
せんだんの実は今もって黄色く映えていて
光を背にロープのきしみを見ていたあの鳥も
枝に止まったままぴくりともしない。
（中略）
里も故（ゆえ）も失くした鳥が
　ごみしか漁れない日本で
私の言葉を餌に生き延びている。
キィーッとしか叫べない鳥に
　私もだんだんなっていっている。
今に真赤に口が染まりもするだろう。
（後略）

そして，「四月よ，遠い日よ。」ではこう言われています。

鴉が一羽
ふた股の枝先で身じろぎもしない。
そこでそのまま
木の瘤にでもなっただろう。
世紀はとうに移ったというのに
目をつぶらねば見えてもこない鳥が
記憶を今もってついばんで生きている。

秋の詩では，「黒い鳥」とは言われても，「鴉」は名指されていませんでした。鴉はもしかすると，この詩集のタイトルをもじって言えば，「季節を失くした鳥」なのかもしれません。それが春の詩，4 月の詩では名指される。秋の詩のほうには「ロープのきしみ」という言葉があります。これは先ほどのスライドに引用があった「わが性わが命」と照らし合わせると，ビリー・ホリデイが歌った「奇妙な果実」という米国南部の黒人のリンチ殺人を題材とした有名な歌がありますが，「済州四・三」にあっても同じような絞首刑が行われていて，そのロープの上に鴉がいるという情景が示唆されているのではないかと思います。そしてそのあとのところ，日本ではゴミしかついばめな

いということは，鴉にゴミ以外のものがついばめる場所があるということが暗示されているわけですね。そして最後に，鳥となった詩人の口が真っ赤に染まる。要するに死体と血が，名指されないままこの詩の中に埋め込まれている。そして日本における「私」の言葉，つまり金時鐘さんにとってご自分の詩の言葉は，こうしたものの代理物として，この詩の中に現れるということです。何度読み返しても背筋が寒くなるような作品ですけれども，これはもしかすると金石範さんの小説『鴉の死』に対する，金時鐘さんの深い応答なのかもしれません。

残り時間が少なくなってきましたので，原発事故関連の詩に移りたいと思います。先ほどもお話ししましたように，2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分，時鐘さんは新幹線の車中におられました。『背中の地図』のあとがきにはこう書かれています。「日々うすれてゆく関心や記憶が白く透けてしまうまえに，移りゆく過程の一端を気負わずにとどめようと，心に決めていたというのが本当のところだ。放射能汚染という，通常の生活ではまみれるはずもない人工的災禍に追われた人たちの，怒りと困惑の底で醸されている人間的悲しみをわが物としたい，としんそこ願ってのことだった」。そしてこの詩集を，「東日本大震災を改めて思い起こす小さな目覚まし時計」になぞらえておられます。「日本人」は眠り込むことが想定されているわけですね。

この詩集では，やはり昨年 4 月に新宿で朗読された，「渡る」という詩が，私は大変好きです。これは全文を読んでみたいと思います。

小止みになったところだった。
行きずりの私に
西成はどこかと聞いた男がいた。

暮れなずむ歳末の四叉路で
濡れた頭の初老の男と
集会に急ぐ私とが
長い坂の下のその先を右へ折れる
大阪迷路の釜ヶ崎を指で追っていた。

私にもわかる東北なまりだった。
ふくらんだ手提げのビニール袋のへりで
まだ落ちきらないしずくがつらなっていた。
震災災禍の名ばかりの救済からさえ
すっかり見放されてしまった男のようだった。
前こごみにリュックの背を丸めて
だんだら坂を降りていっていた。

思い当たったのだ。
ジングルベルの喧騒がたなびいて
急ごしらえの飾り付けがさざめいていた日,
旭町通りの狭い商店街を抜けたところで
私は見たのだ。

彼とは従兄弟どうしの誰かだったに違いない。
ワンカップ大関の空きびんころがして
垢じみた男が競馬新聞片手にへたりこんでいた。
線量計も身につけず
福島原発で作業をしていた派遣労務者の
あの用済みとなった白髪まじりの男だ。

そういえばあのうら若い労務者も
彼のはぐれた息子ではなかったろうか。
建築現場で腰を打ち
早朝立(あさだ)ちばかりがつづいている
まだらな髭の男のことだ。
深く垂れ込んでいる寒冷前線の底で
なお低い底辺の地へと下りていった男がいた。
いく層もの雲の裏で列島の太陽は傾き
いく筋かの堀をにじませて
冬の汗がにぶく湿地の額で光っていた。

私はこの日
こんにちの詩についての話をしに
交叉点を渡っていた。
建て替えられる超高層ビルの覆いをよじらせて
詩ははたはたと空っ風に散るばかりだった。
伝えるべき何物ももはや私にはなかった。
小さい囲いでただ歯がみして
日々かっさらわれるばかりの私だった。

スクランブル交叉点で
私に道を聞いた人がいた。

離れていても
目見える人は
そこにいた。

私も学生時代を関西で過ごしています。釜ヶ崎にはかつて夏祭りや越冬で通っていた時期がありますので，ぼんやりとこのあたりの風景が記憶に浮かび上がるような気がします。しかし今日は会場に，これはあの交差点のことだとすぐにお分かりになる方，この情景がありありと目に浮かぶという方がたくさんおられるのではないかと思います。去年朗読を伺ってから，私はこの詩を繰り返し読んでいるのですが，この「渡る」というタイトルひとつ取ってもじつに含蓄が深いですね。英語で言えば「パッセージ」，フランス語だと「パッサージュ」となる言葉が，じつは詩や思想の領域で非常に大きな意味を持ってきた。そのことと重なるような表現でもあるのではないかと思います。

しかしまず心を打たれるのは，「西成はどこか」と自分が尋ねられたという冒頭です。そこに微妙な自己像の揺れが感じられます。そして 2 人が指で「大阪迷路の釜ヶ崎」への道筋を追っていく。アリアドーネの糸を手繰る 2 本の指が，ここに描かれている。よく読んでみると，この「従兄弟」と「息子」は，震災前から釜ヶ崎で暮らしている人たちという想定なのですね。ここにはまさに，『背中の地図』としての，列島の階級地図が描かれている。彼らは道をたずねた男性のような原発事故後に収束作業に従事していた人たちではなくて，震災以前に福島原発で，非常に過酷な労働条件のもとで，線量計を身につけることができないような環境で働いていて，そして被曝線量が基準の数値を超えてしまったために，原発で働けなくなって釜ヶ崎に流れてきた人々であるという，そういう想定になっていることが分かります。

そして後半，ここに「はたはた」という擬音語が出てきます。擬音語と擬態語を合わせてオノマトペと呼びますが，私はいつも，金時鐘さんの詩の中に現れる非常に特徴的なオノマトペに惹かれます。この「はたはた」というオノマトペは，少なくとも私の記憶する限り，かつて一度だけ出会ったことがあります。それは『拾遺集』（金時鐘『集成詩集 原野の詩』，立風書房，1991 年所収）という枠に収められていた「涸れた時を佇むもの」という詩の中でのことでした。「バベルの塔とは／有史前のことではない。／はたはたと／うす陽にさらされているシーツがある。」という一節です。オノマトペは，理論的に言えば，厳密な意味である固有言語の体系に収まらない表現領域です。この体系に，言葉に，属しきらないものが，「渡る」では，伝えるべき意味の限界を記すかのように現れてきている。そのように読んでみたいと思います。以前使われたときには，「はたはた」という音は，いわば在日の時間を表していました。他郷で繰り延べられる日々の寝床のシーツの重なりである，在日する時間の「バベル」。今回は，「バベル」という名前は出てきていません。しかし，2011 年に三陸の海岸を襲った大津波を，時鐘さんは繰り返しノアの大洪水になぞらえられました。同じ創世記に出てくる「バベルの塔」，それはここでは超高層ビルであり，その「建て替え」をしている大阪の再開発ですね。この音は原発事故という破局を否認してなおバベル的な構築物の上か

ら聞こえてくるのですから，その意味で「バベル」への参照は暗黙に維持されていると考えられます。「はたはた」はどちらの場合も風に打たれた繊維の立てる音ですが，今回は上方から，「空っ風」，「かっさらわれる」という表現とともに，一層厳しい枯渇を暗示しているように感じられます。鳥も，風も，人も「渡る」。人が「渡る」のはときには海でもあり，ときには密航という形を取ることもあります。そして言葉も「渡る」，「伝えるべき」メッセージの前にも，後にも……。

先日，金時鐘さんからお手紙と一緒に，スピーチの参考にしてもらえればということで，「形そのままに」（『樹林』2019 年春号）という近作を送っていただきました。昨年のスピーチで時鐘さんは，「書かれなくても詩はある」と言われました。これは非常に重要なご発言だったと思います。そして 3 人の日本人の姿を想起されました。一人は，核実験が世界で行われれば必ず 2 日間，雨が降ろうと雪が降ろうと，核兵器反対のプラカードを持って自宅近くの公園に座り込むことを自分に課して生きた広島のサラリーマンの方。そしてもう一人は，恐らく湊川高校にお勤めのときの同僚の方ではないかと思いますが，いわゆる落ちこぼれの生徒たちと，自分の家庭生活が崩壊するのも構わず向かい合った先生。3 人目が，福島原発事故後の状況で，避難地区にとどまって犬や猫，そして牛の世話をしている方。この 3 人の姿は生きている詩であり，書かれない詩というのはこういう人たちのことなのだと言われました。

今回「形そのままに」という作品をいただいて私が思い起こしたのは，金時鐘さんもある時期親しく交流されていた日本人の詩人・黒田喜夫がかつて「反詩」と表現した状況のことです。もはや到底詩にならないような状況が，黒田喜夫の故郷である東北の村には，すでに 50 年代にあった。しかしその詩にならないもの，つまり「反詩」を組み込んで，「詩と反詩」のあいだの関係こそを表現しなければならないのではないか。そういう問題提起を，当時黒田喜夫はしていました。そのことを思い起こすと，今時鐘さんがさらに独創的な形で進められようとしている詩業の方向が，少し見えてくるような気がします。

私は現在，東京オリンピックに反対する運動に関わっております。福島の状況は本当に過酷です。一番厳しい状況に置かれている村や町が，自分たちの所にも聖火リレーが来てほしいと願い出ています。これが，私たちが直面している，到底詩にならない状況です（詩とは言えない翼賛詩が，またしても量産される可能性はありますが）。西日本の原発で再稼働が始まる一方，福島の子どもたちの甲状腺癌の事故との因果関係がいっさい認められないなかで，本当に追い詰められている現地の人々が，これまでもひどい目に遭ってきたにもかかわらず，こうしてまた同じように騙されてしまう。これはまさしく「反詩」的な状況です。「形そのままに」という詩で時鐘さんは，現地の人たちのこのような姿もまた詩に組み込むことで，原発事故に見舞われた人々の「人間的悲しみをわが物としたい」という抱負を，またひとつ困難な水準で実現しようと努められている。厳しく大胆なところに，さらに一歩進もうとされていることに，深く感銘を受けています。少しだけその一節を読ませていただいて，私の話を終えたいと思います。

その地でなければ

向き合えない外部がある。
（中略）
事の初めのそのまえからも
利権は地域の利得と絡んだ期待であったのであり
寒村僻地に取り付いた
尽きない希求の執着だったものだ。

「光の棘」は時鐘さんが，「天外の火」とともに，この間の詩の中で，原子力発電，あるいは原子力エネルギーのことを名指されるときの表現です。

光の棘もものかわ
牛蒡の形そのままに押し返す
一本の牛蒡でしかありえぬために
形そのままに禍いは
外部としてそこに在らねばならぬ。

これは福島から一本の牛蒡が届いたということを端緒に書かれた詩ですが，この「牛蒡の形そのままに」という表現で，金時鐘さんはまた，新たな謎を私たちに投げかけられているのではないかと思います。

金時鐘さん，これからもどうぞお元気で。さらにお仕事を続けられ，私たちを困惑させてください。今日はありがとうございました。